

佐藤智之さん

(シエムリアップ淡水魚研究所代表)

「これ、ホンマにカンボジアにおるんかね」

勤務先の水族館で展示された魚に抱いた疑問。解明しようとカンボジアに飛び、ついには移り住んでしまった。自前の淡水魚研究所を開設し、いつかカンボジアに水族館を作りたいと奮闘する佐藤さんに聞いた。

こんなに面白いことはない

——カンボジアで淡水魚の研究所を設立した経緯を教えてください。

きっかけは十八年前です。当時、ぼくは滋賀県の琵琶湖博物館の水族展示で、淡水魚の管理、飼育を担当していました。博物館では、東南アジア最大の湖であるカンボジアのトンレサップ湖に生息するとされる魚も展示していたのですが、ある日、上司にふとした疑問を口にしたんです。

「これ、ホンマにカンボジアにおるんかね」
上司にえらく怒られました。新人が展示にいちやもんをつけたと思われたのでしょう。でも上司は展示された魚が本当にトンレサップ湖に生息しているのかどうか答えられなかった。だったら行ってみるか、と同僚だった相棒と一緒にカンボジアを旅したんです。
——二〇〇〇年といえば、まだ治安も安定していなかったのでは？

首都のプノンペン空港に降りたのですが、まだ街のいたるところに銃を持っているおじさんがいました。ものすごいところに来てしまったと驚きました。しか

も二人とも初の海外旅行でしたから、なおさらです。比較的治安がいいトンレサップ湖があるシエムリアップに向かい、すぐにシエムリアップ川で投網を打ったんです。

——記念すべき第一投ですね。

そうですね。以来数え切れないほど投網を打ちますが、最初にかかったのはコイ科の魚でした。本当に楽しくて、うれしくて……。一週間の滞在中、トンレサ

ップ湖やあちこちの川で、夢中で網を投げていました。だって日本の熱帯魚屋で売っている魚が自分が投げた網にかかるんですよ。

——「ホンマにカンボジアにおるんかね」という疑問は解決したんですか？

いえ、疑問はさらに深まりました。捕まえた魚はホルマリン標本にして琵琶湖博物館に持ち帰ったのですが、調べてみると名前がわからない。そこでカンボジアの淡水魚について書かれた世界唯一の英文資料『カンボジアの淡水魚』を取り寄せてみました。著者であるアメリカ人の魚類学者も前書きで、「この本は同じメコン川が流れるタイやベトナムの研究成果を集めて推測で書いた。フィールドワークで作った図鑑ではありません」と記していました。

誰も知らない魚の生態を明らかにする——こんなに面白いことはないと感じました。博物館の長期休暇を利用して、最低年に一回、多いときには四回、カンボジアでフィールドワークをしているうちに、いつか博物館で自分が納得できる飼育管理のスキルを身につけたらシエムリアップに移り住んで調査に没頭したいと思うようになりました。そして二〇一〇年に「シ



●さとう・ともゆき 1976年生まれ。妻と娘の3人家族でカンボジア・シエムリアップに在住。プライベートの研究所を拠点にカンボジアに生息する全淡水魚の分布調査をテーマとしている。カンボジア水産局や各国の魚類研究者らとの共同研究のほか、フィールド案内、自然環境教育といった活動も行なっている。